御殿内に咲く桜

京都御所には約1,800面の障壁画がありますが，風景，花鳥，走獣等，様々な題材が用いられています。本号の花ごよみに合わせ，京都御所の諸大夫の間に画かれている桜をご紹介します。



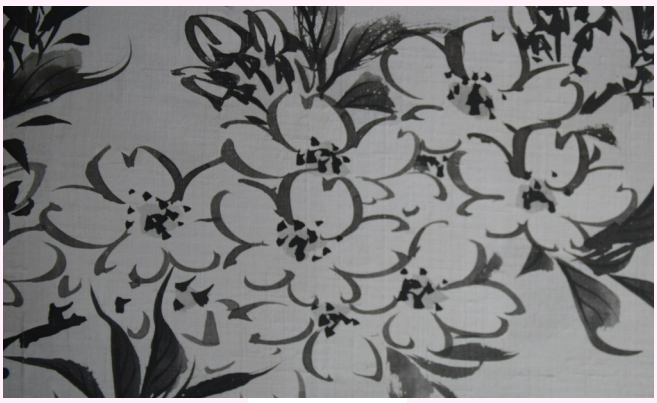
北面　通

諸大夫の間（桜の間）

諸大夫の間は，東から順に，「虎の間」（琹其の二十），「鶴の間」（琹其の一），「桜の間」と三部屋で構成され，参内した人の控えの間として使用されましたが，身分によって使用する部屋が区別されていました。ご紹介する桜の間は，三部屋の中で格付けが最も下になる部屋でした。現在では虎の間，鶴の間，桜の間の三間の総称を諸大夫の間と呼んでいますが，本来，諸大夫の間というと桜の間を表していました。

桜の間の襖には，麻を下地に墨を用いて，東西南北の襖・戸襖・張付（計18面）に桜が画かれています。とても力強い木の幹の表現や，満開の状態で画かれた花びら（写真：中段）が，水墨画でありながら華やかな印象を与えてくれます。

作者は，安政2年（1855）安政度御造営の際に，御学問所や御常御殿など，77面もの障壁画を担当した原在照です。原在照は，原派の3代目となる人物で，明治天皇即位の際には，曲水の宴の屏風を制作するなど，宮中の御用を多く務めています。



桜の花びら



東面　通